

谷野遺跡、岸本遺跡（第4次）発掘調査報告

— 三重県松阪市飯高町所在 —

2010（平成22）年3月

三重県埋蔵文化財センター



谷野遺跡・岸本遺跡全景（北から）



谷野遺跡全景（南から）

序

三重県の中央部を流れる橿田川は、奈良県との境にある高見峠に端を発し、松阪市域を横断して伊勢湾に流れ込みます。川沿いには古くからの人々の生活の痕跡が残されています。谷野遺跡と岸本遺跡は、橿田川上流に位置する遺跡です。近くには中世城館も多く、この流域が古くから開けていたことがうかがえます。

今回の発掘調査は、県道運峡線の整備に伴って行われたもので、開発に伴う緊急調査です。我々が現代社会をより豊かに暮らすためには、開発は必要不可欠なものです。その一方で地域の歴史を語る遺跡が失われていくにあたり、これらを記録保存し、後世に伝えていくのも我々の使命であると考えております。今後は、こうして蓄積された成果をより多くの人々に有効に活用されるように努力していきたいと考えております。

なお、最後になりましたが、調査にあたりましては地元の方々をはじめ、松阪市教育委員会、三重県県土整備部には多大なるご理解とご協力を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

平成 22 年 3 月

三重県埋蔵文化財センター

所長 河 北 秀 実

例 言

1. 本書は、三重県松阪市飯高町宮本にある谷野遺跡の発掘調査、及び同森にある岸本遺跡の第4次発掘調査の報告書である。
2. 調査の原因は、平成19・20年度の県道運峡線道路改築事業である。当該調査にかかる費用は、三重県県土整備部が負担した。
3. 当該調査及び整身体制は下記のとおりである。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

【谷野遺跡】 調査研究Ⅰ課 主査 竹田憲治、西村美幸

【岸本遺跡（第4次調査）】 調査研究Ⅰ課 主査 西村美幸、
臨時技術補助員 酒井巳紀子、山本達也

発掘調査業務委託先

【谷野遺跡】 有限会社 中浦土木（土工委託）

【岸本遺跡（第4次調査）】 松阪建設事務所の労務提供による

整理担当 三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ⅰ課・情報普及課・支援研究課（平成19・20年度）

調査研究Ⅰ課・活用支援課（平成21年度）

4. 調査期間及び調査面積は下記のとおりである。
【谷野遺跡】平成20年9月16日～平成20年12月9日 962㎡
【岸本遺跡（第4次調査）】平成19年11月20日～平成19年11月26日 148㎡
5. 調査にあたっては、地元の方々、松阪市教育委員会、三重県県土整備部道路整備室、及び松阪建設事務所からのご協力を得た。
6. 報告書の執筆は竹田、西村が、全体の編集及び遺物写真撮影は西村が行なった。
7. 本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

<地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、県道蓮峽道路改築事業の工事図面、松阪市作成の1/2,500都市計画図である。
- 2 挿図の方位は、世界測地系・測地成果2000による座標北で表している。なお、この地域の磁北は真北に対して6°50′西偏している。(平成15年国土地理院)

<遺構類>

- 1 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(1999年版)を用いた。
- 2 本書で使用した遺構表示略号は下記のとおりである。
SB：掘立柱建物 SA：柱列 SH：竪穴建物 SF：炉 SK：土坑 SD：溝
Pit・P：柱穴・小穴

<遺物類>

- 1 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。
- 2 遺物実測図は、各遺跡ごとの通番としている。
- 3 当報告書での用語は、「わん」は「椀」に統一している。
- 4 出土遺物観察表は、以下の要領で記載している。
番号 …………… 出土遺物実測図掲載番号である。
実測番号 …………… 実測段階の登録番号である。
様・質 …………… 「陶器」「土師器」などの区分をここに示した。
器種など …………… 遺物の器種を示した。
グリッド …………… 調査時に設定したグリッド名を記した。
遺構・層名等 …………… 遺物の出土した遺構名や層名などを記した。
大きさ(cm) …………… 遺物の大きさを示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(高台)は高台部径、(高)は器高を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。
調整・技法の特徴 …… 主な特徴を示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。
胎土 …………… 小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
色調 …………… その遺物の代表となる色調を記載した。表記は前掲『新版標準土色帖』に拠る。
残存度 …………… その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分を示す。
特記事項 …………… 遺物の特徴となる事項を記した。

<写真図版>

- 1 写真図版は、遺構・遺物毎でまとめた。
- 2 出土遺物実測図と写真図版の遺物番号は対応している。
- 3 遺物の写真図版は、縮尺不同である。

本文目次

第1章 前言	
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の方法	2
第2章 位置と環境	6
第3章 谷野遺跡	
第1節 遺構	8
第2節 遺物	16
第3節 自然科学分析	19
第4節 結語	24
第4章 岸本遺跡(第4次調査)	26
第5章 総括	28

図版目次

第1図 遺跡周辺地形図	3
第2図 谷野遺跡調査区位置図	4
第3図 岸本遺跡調査区位置図	5
第4図 遺跡位置図	7
第5図 1区 遺構平面図	(谷野遺跡) … 9
第6図 2区 遺構平面図	(") … 10
第7図 土層断面図	(") … 11
第8図 掘立柱建物平面・断面図(1)	(") … 12
第9図 掘立柱建物平面・断面図(2)	(") … 13
第10図 竪穴建物、炉、土坑、柱列平面・断面図	(") … 14
第11図 出土遺物実測図(1)	(") … 16
第12図 出土遺物実測図(2)	(") … 17
第13図 遺構配置図	(") … 24
第14図 出土遺物実測図	(岸本遺跡) … 26
第15図 土層断面図	(") … 26
第16図 遺構平面図	(") … 27

表 目 次

第1表	谷野遺跡範囲確認調査結果一覧表	(谷野遺跡)	4
第2表	遺構一覧表	(")	15
第3表	出土遺物観察表	(")	18
第4表	試料の履歴と調査項目	(")	22
第5表	試料の化学組成	(")	22
第6表	試料の分析結果	(")	22
第7表	鍛造剥片抽出一覧表	(")	23
第8表	掘立柱建物・柱列観察表	(")	25
第9表	出土遺物観察表	(岸本遺跡)	26

写真図版目次

巻頭写真図版1 谷野遺跡・岸本遺跡全景

巻頭写真図版2 谷野遺跡全景

写真図版1	調査区全景	(谷野遺跡)	31
写真図版2	1・2区中心部、2区中心部	(")	32
写真図版3	1区全景、S B 16・17	(")	33
写真図版4	2区全景	(")	34
写真図版5	屋敷地3周辺、S K 12	(")	35
写真図版6	S F 11集石除去前、S F 11集石除去後	(")	36
写真図版7	調査前風景、作業風景	(")	37
写真図版8	現地説明会風景、工事中の状況	(")	38
写真図版9	出土遺物(1)	(")	39
写真図版10	出土遺物(2)	(")	40
写真図版11	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織およびE P M A調査結果	(")	41
写真図版12	椀形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織およびE P M A調査結果	(")	42
写真図版13	A地区全景、A地区中心部	(岸本遺跡)	43
写真図版14	B地区全景、作業風景	(")	44

第1章 前 言

第1節 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

(1) 谷野遺跡

谷野遺跡(松阪市遺跡番号e79)は、松阪市飯高町宮本に所在する遺跡である。一般地方道運鉄線の道路改築事業の計画書が提出され、それを受けた三重県埋蔵文化財センターでは、事業地内の埋蔵文化財の有無を確認するために分布調査を行い、事業地内の4,200㎡について埋蔵文化財が存在する可能性があり、範囲確認調査が必要である旨を回答した。

範囲確認調査は平成18年2月24日と平成19年6月5日に行った(第1図・第1表参照)。その結果、事業地内の962㎡に柱穴などの遺構を確認し、さらに保護のための協議を重ねた結果、当該箇所に関して、記録保存のための発掘調査を行うことになった。

(2) 岸本遺跡(第4次調査)

岸本遺跡(松阪市遺跡番号e9)は、松阪市飯高町森に所在する遺跡である。

三重県教育委員会では、昭和59年度に実施された畜産経営環境整備事業に先がけて、掘削される部分400㎡を対象に、9月10日～同11日に発掘調査を行った(第1次調査)。その結果、縄文時代から室町時代にかけての遺構や遺物を確認した。

その後、平成12年中山間地域総合整備事業が行われた際に遺物が出土したため、飯高町教育委員会が38箇所の調査坑を設けて範囲確認調査を行った。その結果、縄文時代の遺物や炉穴を伴った竪穴住居と考えられる遺構、弥生時代の遺物、中世の遺物などを確認した。

平成15年度に、岸本遺跡を横断する一般地方道運鉄線の道路改築事業の計画書が提出された。県教育委員会および三重県埋蔵文化財センターでは、遺跡の保存のため県土整備部と協議を行い、遺跡の性格・範囲を確定するため11,400㎡について、範囲確認調査を行うことになった。

範囲確認調査は、平成17年3月18日、29日及び平成18年3月3日に実施した。その結果、第1次調査

区の南部分2,000㎡で縄文時代と平安時代の遺構・遺物を確認し、さらに保護のための協議を重ねた結果、当該箇所の2,000㎡について、記録保存のための発掘調査を行うことになった(第1図参照)。

発掘調査は、平成17年度から平成19年度の3ヵ年で行った(第2次調査～第4次調査)。発掘調査では縄文時代から室町時代の遺構と遺物を確認した。本書で報告するのは、平成19年度に行った第4次調査の成果である。

2 文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

(1) 谷野遺跡

・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項(県教育長宛)

平成20年5月16日付け松建第128号

・文化財保護法第99条の第1項(県教育長宛)

平成20年9月24日付け教理第252号

・遺失物法による文化財発見・届出通知

(松阪警察署長宛)

平成20年11月21日付け教委第12-4415号

(2) 岸本遺跡(第4次調査)

・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項(県教育長宛)

平成18年4月26日付け松建第136号

・文化財保護法第99条の第1項(県教育長宛)

平成19年11月20日付け教理第267号

・遺失物法による文化財発見・認定通知

(松阪警察署長宛)

平成20年1月18日付け教委第12-4-17号

(竹田・西村)

第2節 調査の方法

1 谷野遺跡

(1) 調査の体制

三重県埋蔵文化財センターでは、発掘調査の土工部門（土木作業、安全管理、調査員・作業員詰所などの仮設、測量）などを民間業者に委託している。谷野遺跡の発掘調査は、土工部門を有限会社中浦土木に委託して発掘調査を行った。

(2) 調査区の設定

通路を挟んで発掘調査箇所が2箇所に分かれたため、南側を1区、北側を2区として調査を行った。発掘調査にあたり、X=-177370、Y=19950を起点にして、東西方向にA～Tのアルファベット順、南北方向に1～16の数字順に4m×4mの方眼（グリッド）を設定し、調査の基本単位とした。

(3) 掘削

表土掘削 表土は重機（バックホー）による表土除去を実施した。

遺構検出・遺構掘削 表土除去後、人力による遺物包含層掘削を実施し、その後、遺構検出・遺構掘削を行った。

(4) 記録

遺構番号の付与 遺構番号付与は、小穴（pit、ピットとも表記）以外は遺構種別を超えた通し番号とした。詳細は遺構一覧表に記した。

小穴の番号については、グリッドごとに通し番号を付与した。

記録遺構略図 遺構検出時等、遺構が確認された場合には、グリッド単位で1/40縮尺の「遺構カード」を作成した。ここには、埋土の状況・遺構の重複関係を記したほか、遺物取り上げにおける遺構番号の台帳としても使用した。また調査区内の遺構の分布などを把握するため、遺構カードを転写し、1/100縮尺の「遺構略図」を作成した。

遺構実測図 調査区全体図及び調査区の土層断面図は、1/20縮尺で手描実測を行った。遺物の出土状況は1/10縮尺で手描実測を行った。

遺構写真 基本的に4×5インチ判の白黒ネガ・カラーリバーサルフィルムで撮影し、補助的に35mm判の白黒ネガおよびカラーリバーサルフィルムも使用

した。空中写真撮影には、6×6ブローニー判フィルムを使用した。また必要に応じてデジタルカメラでも撮影した。

遺物実測図 遺物実測は、出土遺物から図化が可能なものを選び出し、1/1の実測を行った。

遺物写真撮影 報告書掲載遺物から任意に選択し、ブローニー判白黒ネガフィルムで撮影した。（竹田）

2 岸本遺跡（第4次調査）

(1) 調査の体制

発掘調査面積が狭小であったため、事業部局である松阪建設事務所から、労務・資材の提供を受ける形で発掘調査を行った。現地の管理は松阪建設事務所が委託した株式会社北村組が行った。

(2) 調査区の設定

第3次調査区の東西2箇所の発掘調査を行った。便宜上、東側をA地区、西側をB地区とした。調査区の幅が狭かったため小地区は設定しなかった。

(3) 掘削

表土掘削 表土は重機（バックホー）による表土除去を実施した。最近のものと考えられる攪乱坑も、場所によっては、バックホーでの掘削を行った。

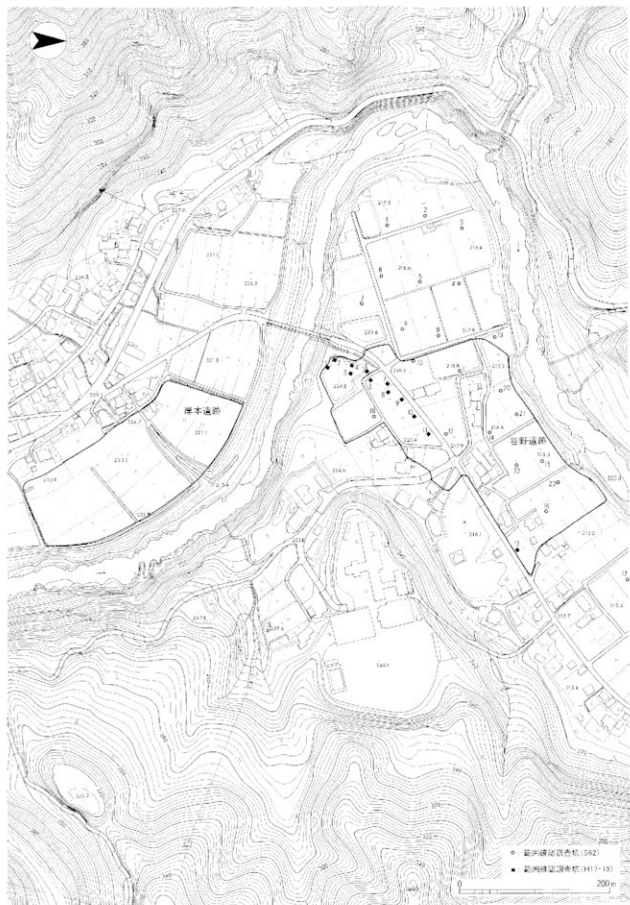
遺構検出・遺構掘削 表土除去後、人力による遺物包含層掘削を実施し、その後、遺構検出・遺構掘削を行った。

(4) 記録

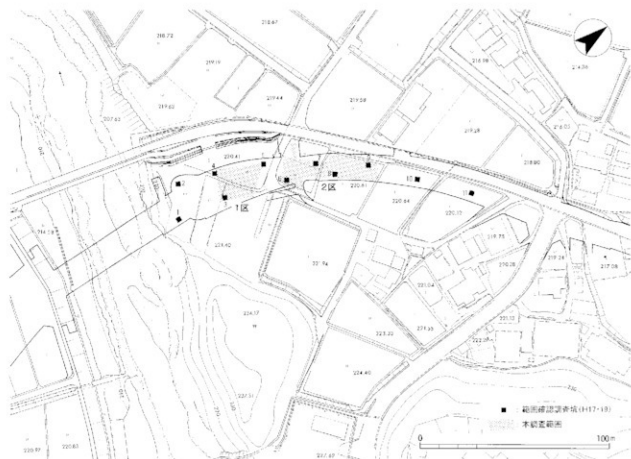
遺構番号の付与 第3次調査で確認した溝の続きを確認したのみで、新たな遺構は検出できなかった。小穴（pit）については遺物が出土したのものにのみ通し番号を付与した。

記録遺構略図 発掘調査区が狭小であったため、1/40縮尺の遺構略図（遺構カード）は作成しなかった。

遺構実測図 調査区全体図は平板を用い、1/100縮尺で行った。この際記録した基準点を測量して国土座標（世界測地系）の数値を与え、過去の発掘調査地点との位置関係を把握できるようにした（過去の発掘調査箇所は第3図参照）。土層断面は1/20縮尺の手描実測を行った。



第1図 道跡周辺地形図 (1 : 5,000)



第2図 谷野遺跡 調査区位置図 (1 : 2,000)

調査年度	調査坑番号	遺構	遺物	備考	調査年度	調査坑番号	遺構	遺物	備考
S62	1	—	—		S62	19	—	—	
S62	2	—	—		S62	20	小穴	土師器片	
S62	3	—	—		S62	21	土坑・小穴	—	
S62	4	—	—		S62	22	土坑	陶器片、土師器片	
S62	5	—	—		S62	23	小穴	—	
S62	6	—	—						
S62	7	—	—		H19	1	—	—	
S62	8	—	—		H19	2	—	—	
S62	9	—	—		H19	3	—	—	
S62	10	土坑・小穴	土師器片		H19	4	—	—	
S62	11	—	—		H19	5	小穴	—	
S62	12	—	—		H19	6	小穴	—	
S62	13	—	—		H19	7	小穴	—	
S62	14	小穴	青磁片、土師器片		H17	8	土坑・小穴	—	H17調査の8
S62	15	—	青磁片、土師器片		H17	9	土坑・小穴	—	H17調査の6
S62	16	土坑	—		H17	10	—	土師器小片	H17調査の7
S62	17	小穴	—		H17	11	土坑	—	H17調査の9
S62	18	—	—		H17	12	なし	—	H17調査の5

第1表 谷野遺跡範囲確認調査結果一覧表



第3図 岸本遺跡 調査区位置図 (1 : 2,000)

遺構写真 6×7ブローニー判と35mm判の白黒ネガおよびカラーリバーサルフィルムを使用した。

遺物実測図 遺物実測は、出土遺物から図化が可能なものを選び出し、1/1の実測を行った。(西村)

〔註〕

①昭和62年度と平成17・19年度の調査結果を合わせて記載した。岸本遺跡の調査結果は、第2・3次調査の報告書参照。

②岸本遺跡の当初の遺跡番号はe33であったが、松阪市による平成19年度の分布調査でe9に変更した。(松阪市教

育委員会『三重県松阪市遺跡地図』2008年)

③三重県教育委員会『岸本遺跡』『昭和59年度県営園地整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1985年

④三重県埋蔵文化財センター『平成12年度三重県埋蔵文化財年報』2001年、及び、飯高町教育委員会の範囲確認調査結果

⑤三重県埋蔵文化財センター『岸本遺跡(第2・3次)発掘調査』2008年

⑥調査区位置図は、本来は最新の工事図面などをもとに作成している。しかし、岸本遺跡については、ほ場整備前の地形図をベースに、ほ場整備後の地形図を波線で、道路計画線を太線で合成して作成した。

第2章 位置と環境

1 地理的環境

谷野遺跡(1)は、松阪市飯高町宮本字川辺・木戸口に、岸本遺跡(2)は、松阪市飯高町森字岸本に位置する遺跡である。谷野遺跡は榊田川上流の右岸、岸本遺跡は左岸の、いずれも標高約220mの河岸段丘上に位置する。

両遺跡は榊田川の上流域にあり、北には高見山地、西側から南側には大台山系の山々がせまっている。遺跡の西方約10km地点で高見峠に達し、その向こうは奈良県吉野である。

2 歴史的環境

この地域の歴史的環境については、岸本遺跡の第2・3次調査の報告書で詳細に記述されている²⁾。今回は、岸本遺跡のこれまでの調査結果をまとめるとともに、周辺の歴史的環境については、今回の調査で確認された中世の時期を中心に概述したい。

(1) 岸本遺跡の調査概要

岸本遺跡の第1次調査は、昭和59年度に畜産経営環境整備事業に伴って400㎡を調査した。調査の結果、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物1棟、室町時代の土坑を確認した。遺物はこれらの時代以外に縄文土器、弥生時代中期の甕も出土している³⁾。

平成12年度には飯高町による範囲確認調査が行われ、縄文時代の遺構、遺物を確認した⁴⁾。

第2・3次調査は、平成17・18年度に県道連峽線道路改築事業に伴って1,729㎡を調査した。調査の結果、室町時代後期を中心とした土坑群と柱穴の可

能性のある小穴を確認した。土坑には、石が多量に入れられていたものもあった。また、自然科学分析の結果、墓の可能性が指摘された土坑もあった。出土遺物は、室町時代後期のほかに、縄文時代後期、弥生時代中期、古代の遺物が出土している。

(2) 周辺の遺跡

榊田川上流域である飯南町粥見～高見峠は、通称「川俣谷(かばたに)」と呼ばれる。この地域一帯は、近世の和歌山街道が通り、それ以前にもルートはあった可能性が高いと考えられている。川俣谷は、飯高町滝野地区から北へ峠を越えると、北畠氏の本拠多気(津市美杉町多気)に着く。西の高見峠を越えると大和国吉野である。また榊田川を東へ下ると、大河内・坂内等の北畠氏にとっての重要地がある。これらのことから、北畠氏にとって川俣谷は重要な地点であったと考えられている⁵⁾。

この川俣谷には、上流から森城跡(3)、谷野城跡(4)、七日市城跡(5)、富永城跡(6)、福本城跡(7)、九十九曲城跡(8)などの中世城館があり、川沿いの交通が監視できるようになっている。谷野城跡は谷野遺跡の南にある小丘陵上にあり、8m×8mの台状地に土塁、堀が確認されている⁶⁾。北畠氏滅亡後の天正5年(1577年)、北畠具教の弟である具親は、北畠氏再興のため挙兵したと伝えられ、川俣谷の諸侍は具親に味方している。結果は織田方に敗れ、川俣谷の城館もその時に落城したと伝えられている⁷⁾。

周辺の中世の遺物散布地には、岸本遺跡の西の山際には寺のまへ遺跡（9）が、谷野遺跡の800mほど下流には平瀬遺跡（10）が、谷野遺跡の対岸段丘上にある小扇状地には、壱みがせ遺跡（11）、上り遺跡（12）、大屋敷遺跡（13）、堂坂遺跡（14）、込垣内遺跡（15）、坂口B遺跡（16）、西端遺跡（17）があり、中世の遺物が採集されている。谷野遺跡、岸本遺跡の周辺には広範にわたって中世の集落が存在していたと考えられよう。（西村）

【註】

①三重県埋蔵文化財センター『岸本遺跡（第2・3次）発掘調査報告』2008年

②三重県教育委員会「岸本遺跡」『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1985年

③註①に調査箇所と結果一覧が記載されている。

④註①と同じ

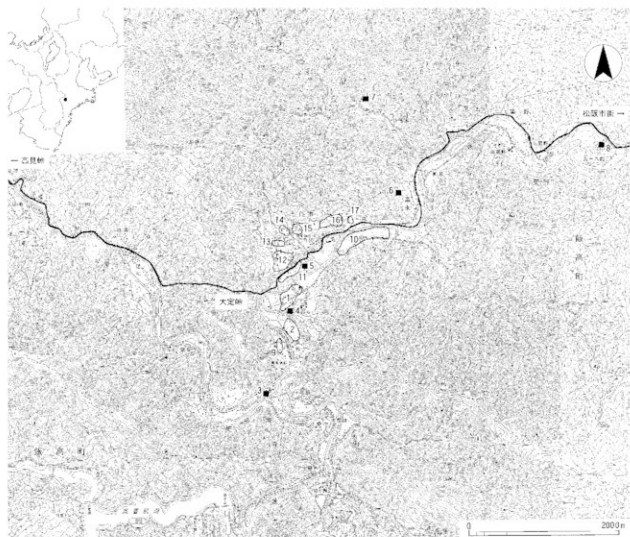
⑤註①と同じ

⑥山本浩之「防御パーツの組み合わせによる城郭遺構の分類（上）—南伊勢の諸城を中心として—」『中世城郭研究』第16号 中世城郭研究会、2002年

⑦『勢州四家記』『勢州軍記』（『群書解題』13）

⑧安岡親教『勢陽五鈴遺響』（天保4年（1833）成立 三重県郷土資料叢書第76集 三重県郷土資料刊行会、1972年）

⑨松阪市による詳細分布調査で多くの遺跡の存在が確認された。松阪市教育委員会『三重県松阪市遺跡地区』2008年



第4図 遺跡位置図（1：50,000）[国土地理院「七日市」「管野」「宮前」「江馬」1：25,000より作成]

第3章 谷野遺跡

第1節 遺構

谷野遺跡の発掘調査では、掘立柱建物10棟、堅穴建物1基、柱列1条、土坑を確認した。

1 掘立柱建物

S B 16 桁行3間以上、梁行2間の側柱建物である。柱穴から青磁碗(1)が出土した。S B 17と形状、規模が似ており、前後関係は不明であるものの、連続した時期の建物である可能性が高い。

S B 17 桁行3間以上、梁行2間の側柱建物である。柱穴から小柄(2)が出土した。S B 16との関係は前述のとおりである。

S B 19 桁行3間以上、梁行2間の側柱建物である。確認されているすべての柱穴の底に根石を持っている。S B 25、26との前後関係は不明であるものの、連続した時期の建物である可能性が高い。柱穴から煙管の吸口(3)が出土した。

S B 20 桁行2間以上、梁行2間の側柱建物と考えられる。発掘調査区内ではこの建物とS B 24のみが南北棟である。重複するS B 22との前後関係は不明である。

S B 21 2間以上×1間以上の建物。大部分が調査区外になるため詳細は不明である。重複するS B 22、23との前後関係も不明である。柱穴から南伊勢系土師器編年の第4段階c～d型式併行の南伊勢系鍋が出土しているため、建物の時期は16世紀前葉から中葉以降である。

S B 22 桁行3間、梁行2間の側柱建物。重複する建物(S B 20・21・23)との前後関係は不明である。柱穴から第4段階c型式に近い南伊勢系土師器鍋が出土しているため、建物の時期は16世紀前葉以降である。S B 23と形状、規模が似ており、連続した時期の建物である可能性が高い。

S B 23 桁行3間、梁行2間の側柱建物。重複する建物(S B 20・21・22)との前後関係は不明である。柱穴から第4段階c～e型式の南伊勢系土師器鍋が出土しているため、建物の時期は16世紀中葉以降である。

S B 24 桁行3間、梁行2間の側柱建物。この建物とS B 20のみが南北棟になる。重複するS H 13との前後関係は不明である。柱穴からは第4段階の南伊勢系土師器鍋の小片が出土しているが、15世紀後半以降の建物としかいえない。

S B 25 桁行3間以上、梁行2間の側柱建物である。重複するS B 19、26との関係は前述のとおりである。

S B 26 桁行3間以上、梁行3間の側柱建物である。重複する、S B 19、25との関係は前述のとおりである。

2 柱列

S A 18 S B 16・17の西で確認した、4間の柱列である。方向はS B 16・17とは異なる。

3 堅穴建物

S H 13 一辺3.2m程、深さ17cm程の略方形の堅穴である。遺構の肩が不明瞭で底も平らにならない。周囲に柱穴があり、堅穴の周りを囲う建物が建てられていたと考えられる。柱穴の中には、斜めに掘り込まれたものもある。建物の北東・南東辺には小穴が掘られている。埋土には焼土を含む。埋土からは第3段階a～b型式、第4段階b～d型式の南伊勢系土師器鍋、南伊勢系B形態の土師器皿、南伊勢系の羽釜、常滑産の片口鉢、瀬戸美濃産の掃鉢が出土している。重複するS B 24との前後関係は不明である。出土遺物から見ると遺構時期は16世紀中葉以降と思われる。

4 炉

S F 11 長軸1.3m、短軸1.1m、深さ約32cmの楕円形の穴。周囲の壁は被熱している。北西側の壁がオーバーハングする。埋土から常滑窯編年の第10型式の常滑産の甕と礎がまとまって出土した。これらも被熱しており、炉の構造材であった可能性がある。埋土からはこのほか、南伊勢系B形態の土師器皿、鍋の小片、古瀬戸後期の直縁大皿、青磁碗、鉄釘(27)、炭化物が出土している。出土遺物から遺構の時期は15世紀後半以降である。

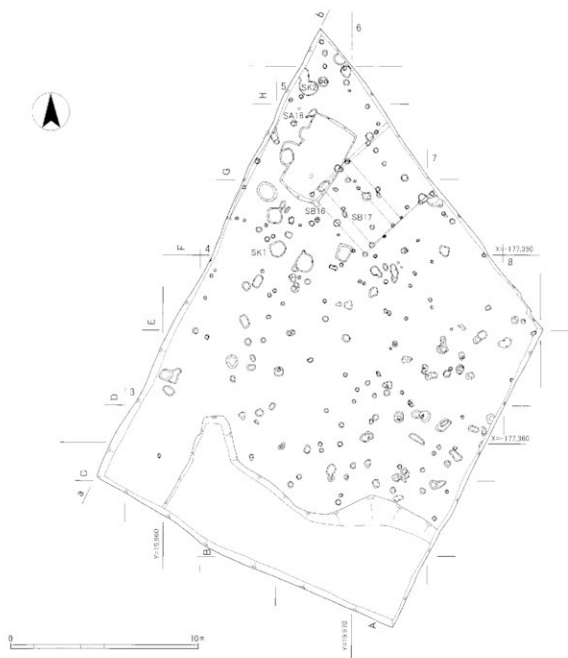
5 石組土坑

SK12 一辺が3.6m程、深さ約52cmの方形の土坑の側に川原石が並べられている。埋土中にも川原石が含まれていたため、2段以上の石組みがあった可能性が高い。南東の隅付近に小穴があり、柱が立っていた可能性もある。埋土から第4段階b～f型式の南伊勢系土師器鍋、常滑産の片口鉢、青磁碗が出土している。このうちの青磁碗はSK6出土のものと同一体であると思われる。遺構の時期は16世紀後半以降である。

6 土坑群

建物群の周囲で径1m弱の土坑群（SB16・17の周囲ではSK1・2、SB20～24の周囲ではSK3～10・14・15）を確認した。多くの土坑は少量の遺物しか出土せず、遺物が全く出土しない土坑もある。同様の土坑群は津市美杉町多気道跡群土井沖地区や松阪市下茅原町東沖道跡などでも確認されている。

（竹田）



第5図 1区 遺構平面図（1：200）

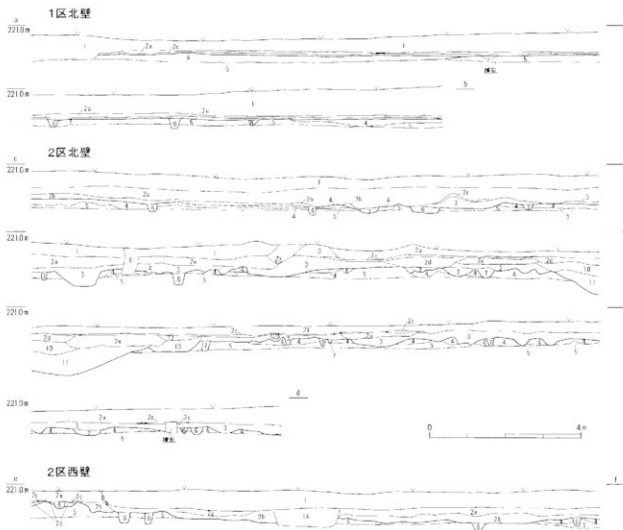


第6図 2区 遺構平面図(1:200)

〔註〕

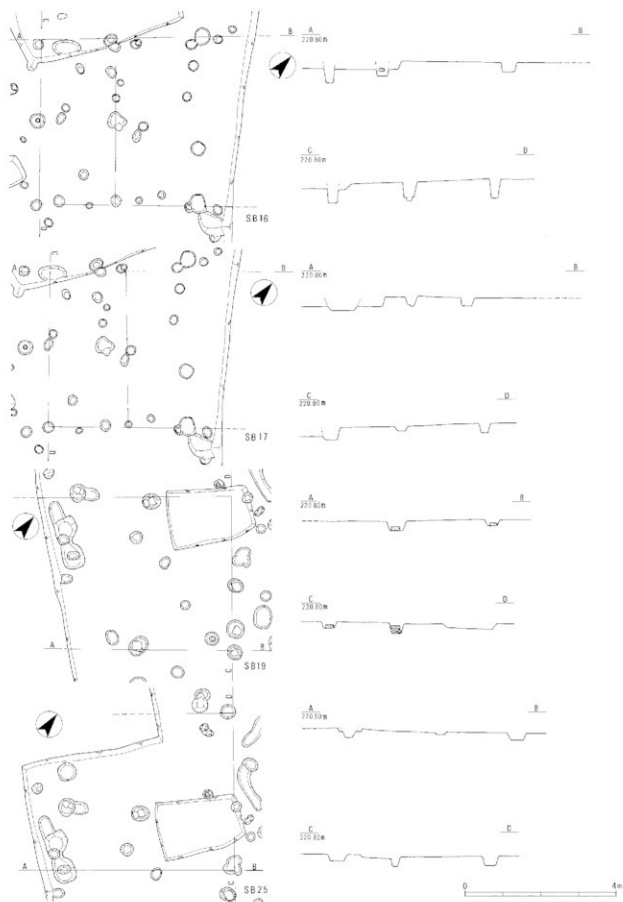
- ①伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990年及び、伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土師器工人」『研究紀要 第1号』三重県埋蔵文化財センター 1992年。による。
 ②美杉村教育委員会「総括～これまでの北畠氏館跡発掘調査～」『北畠氏館跡9』2005年の南伊勢系の土師器区分類による。

- ③中野晴久「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年
 ④三重県埋蔵文化財センター「多気遺跡群発掘調査報告」1993年
 ⑤三重県埋蔵文化財センター「下茅原遺跡（第1次・第2次）、東沖遺跡発掘調査報告」2009年

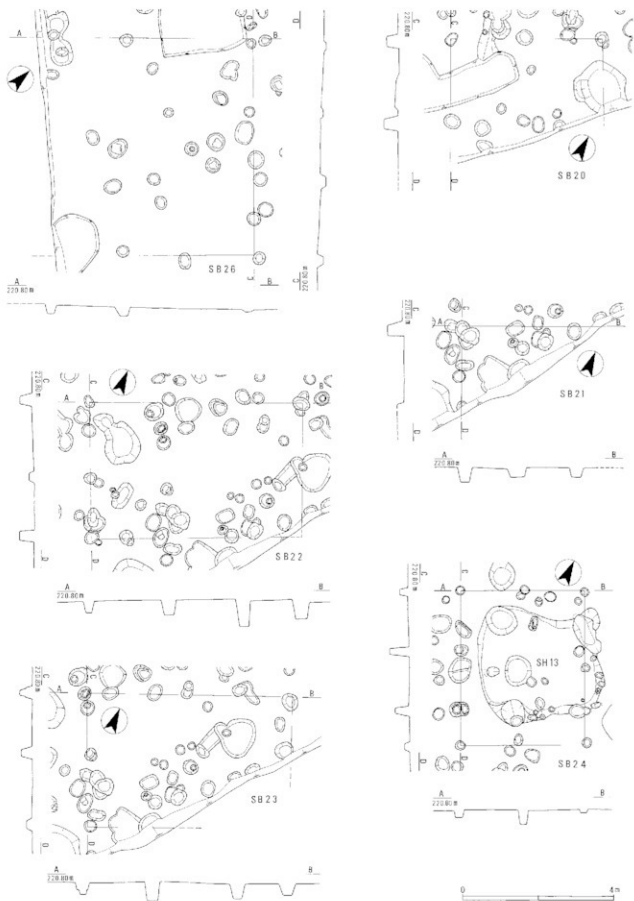


- | | |
|------------------------------------|-------------------------|
| 1 置土 におい黄色褐色礫まじり10YR7/2 | 6 遺構埋土 黒色土10YR2/1 |
| 2a 旧耕作土（水田耕土） 褐灰色シルト10YR6/1 | 7 遺構埋土 灰褐色土7.5YR4/2 |
| 2b 旧耕作土（水田耕土） 褐灰色シルト10YR4/1 | 8 攪乱 におい黄褐色土10YR6/3 |
| 2c 旧耕作土（床土） におい赤褐色砂質土5R5/3 | 9 旧水田の畦 灰褐色土10YR4/1 |
| 2d 旧耕作土（水田造成時の盛土） 灰黄褐色シルト10YR5/2 | 10 S K12埋土 黒褐色土10YR4/1 |
| 2e 旧耕作土（水田造成時の盛土） におい黄褐色砂質土10YR6/3 | 11 S K12埋土 灰黄褐色土10YR4/2 |
| 3 遺物包含層 黒褐色土10YR3/2 | 12 攪乱 褐色砂質土10YR4/1 |
| 4 基盤層 灰褐色砂質土7.5YR5/2 | 13 攪乱 におい黄褐色礫土10YR7/4 |
| 5 基盤層 灰黄色礫2.5YR6/2 | 14 攪乱 灰褐色砂質土7.5YR4/2 |

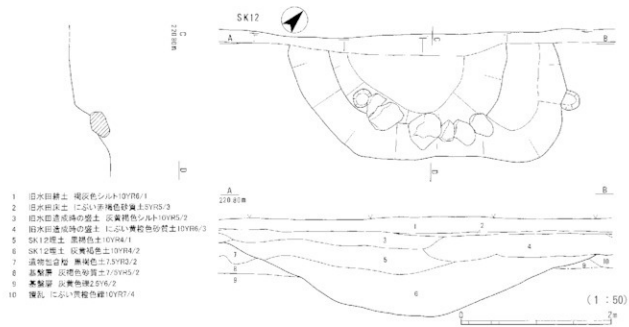
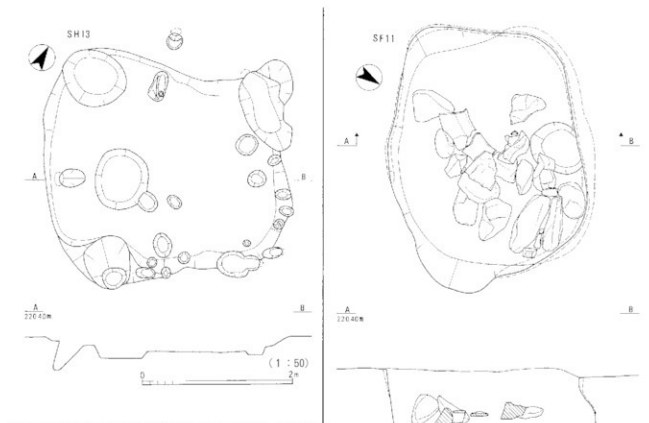
第7図 土層断面図（1：100）



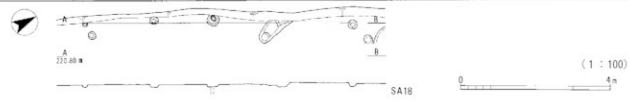
第8图 掘立柱建物平面・断面图(1) (1:100)



第9图 掘立柱建物平面・断面图(2)(1:100)



- 1 旧水田耕土 褐色シルト10YR6/1
- 2 旧水田床土 に近い赤褐色砂質土5YR5/3
- 3 旧水田造成時の盛土 灰黄褐色シルト10YR5/2
- 4 旧水田造成時の盛土 に近い黄褐色砂質土10YR6/3
- 5 SK12層土 黄褐色土10YR4/1
- 6 SK12層土 灰黄褐色土10YR4/2
- 7 流石畑土層 黄褐色土7.5YR3/2
- 8 土層 灰褐色砂質土7.5YR5/2
- 9 土層 灰黄色土2.5Y6/2
- 10 埋瓦 に近い黄褐色土10YR7/4



第10図 竪穴建物、炉、土坑、柱列平面・断面図 (1:50, 1:20, 1:100)

遺構番号	大地区	グリッド	種別	時期	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	出土遺物	備考
SK 1	1区	F 5	土坑	不明	1.0	0.8	15	土師器?小片	
SK 2	1区	H 5	土坑	戦国	1.0	0.7	16	土師器鍋	
SK 3	2区	O11	土坑	戦国	1.1	1.0	21	土師器鍋	
SK 4	2区	N10-11	土坑	不明	2.7	0.9	31	出土遺物なし	
SK 5	2区	N11	土坑	戦国	1.1	1.0	9	土師器鍋	
SK 6	2区	O11	土坑	戦国	1.1	1.0	37	青磁皿 (SK12出土の青磁皿と同一個体)	
SK 7	2区	O11-12, P11-12	土坑	戦国	0.7	0.7	31	土師器皿・鍋	
SK 8	2区	P12	土坑	戦国	1.3	1.0	27	土師器皿・鍋	
SK 9	2区	P12-13	土坑	戦国	0.7	0.6	8	土師器鍋	
SK 10	2区	P11	土坑	戦国	1.1	0.9	35	土師器鍋、常滑甕	
SF 11	2区	P11-12	竪	戦国	1.3	1.1	32	土師器皿・鍋、瀬戸直縁大皿、青磁碗、 常滑甕、鉄釘	
SK 12	2区	P11-12, Q11-12	石組土坑	戦国	3.6	1.3以上	54	土師器鍋、常滑片口鉢、青磁皿 (SK6出 土の皿と同一個体)	
SH 13	2区	Q13-14, R13-14	竪穴建物	戦国	3.2	3.2	17	土師器皿・鍋・羽釜、常滑片口鉢、 瀬戸美濃揉鉢	
SK 14	2区	O13, P13	土坑	戦国	0.9	0.8以上	20	土師器鍋	
SK 15	2区	Q14, R14	土坑	戦国	1.6	1.4	13	土師器鍋	
SB 16	1区	F 5-7, G 6-7	掘立柱建物	戦国				F 6 pit 1 (青磁碗 1)	詳細は 第8表参照
SB 17	1区	F 5-7, G 6-7	掘立柱建物	戦国				G 5 pit 1 (小柄 2)	詳細は 第8表参照
SA 18	1区	F 4, G 4-5, H 5	柱列	不明					詳細は 第8表参照
SB 19	2区	J 7-8, K 7-8	掘立柱建物	戦国					詳細は 第8表参照
SB 20	2区	N12, O12-13	掘立柱建物	戦国					詳細は 第8表参照
SB 21	2区	O13, P13	掘立柱建物	戦国				O13pit 1 (土師器鍋), P13pit 2 (土師器鍋)	詳細は 第8表参照
SB 22	2区	O12-13, P12-13, Q13	掘立柱建物	戦国				P12pit 8 (土師器鍋), P13pit 4 (土師器鍋), P13pit 7 (土師器片), Q13pit 2 (土師器鍋)	詳細は 第8表参照
SB 23	2区	O13, P12-13, Q13-14	掘立柱建物	戦国				P14pit 1 (土師器鍋), Q13pit 3 (土師器鍋)	詳細は 第8表参照
SB 24	2区	Q13-14, R12-13	掘立柱建物	戦国				Q13pit 1 (土師器鍋)	詳細は 第8表参照
SB 25	2区	J 7-8, K 7-8, L 7	掘立柱建物	戦国					詳細は 第8表参照
SB 26	2区	I 8, J 7-8, K 7-8	掘立柱建物	戦国					詳細は 第8表参照

第2表 遺構一覧表

第2節 遺物

遺物は整理箱で10箱分(8.42kg)が出土した。ほとんどが戦国時代の遺物である。

1 掘立柱建物関連遺物(1~3)

1はS B16の柱穴から出土した青磁の椀。底部内面に花文が押印される。2はS B17の柱穴から出土した鉄製の小柄。柄と刀身の端のみ確認できた。刀身側は鋸切断されており、鍛冶などの鉄素材とされたものである可能性がある。3はS B19の柱穴から出土した真鍮製の煙管の吸口。

2 柱穴出土遺物(4~20)

4~20は建物としてまともな小穴(柱穴)から出土した遺物である。

金属製品 4は鉄製の小型の手達鋸。半分ほどが洋化している。鍛冶原料に使われたものであろう。5・6は鉄滓。6は分析の結果、鑄鉄製品を鍛冶原料としている可能性が指摘されている。

土師器 7~9は皿。いずれも南伊勢系で、7・9

はB形態、8はC形態で、概ね15世紀後半に位置づけられる。10~15は鍋。南伊勢系の土師器鍋編年の第4段階c~d型式併行(16世紀前葉から中葉)のものである。15は体部が半球形となる。

磁器 16は青磁碗。外面に蓮蓬弁文が刻まれている。中国の龍泉窯産のもの。

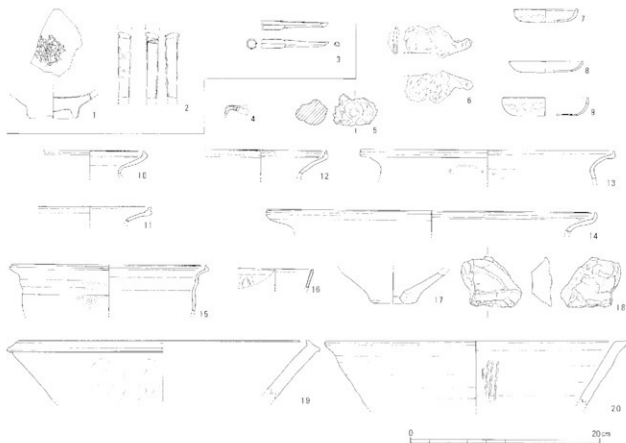
弥生土器 17は甕の底部であらう。今回の調査で図化できる弥生土器はこの1点である。

石製品 18は石英質の火打石。

陶器 19は常滑産の片口鉢。常滑窯編年の第9~10形式併行(15~16世紀)のものである。20は信楽産の播鉢。信楽焼編年の2期古段階併行(15世紀中葉~16世紀初頭)のものである。

3 竪穴建物SH13出土遺物(21~24)

21~23は土師器鍋。24は常滑産の陶器片口鉢。常滑窯編年の第9~10形式併行(15~16世紀)のものであろう。



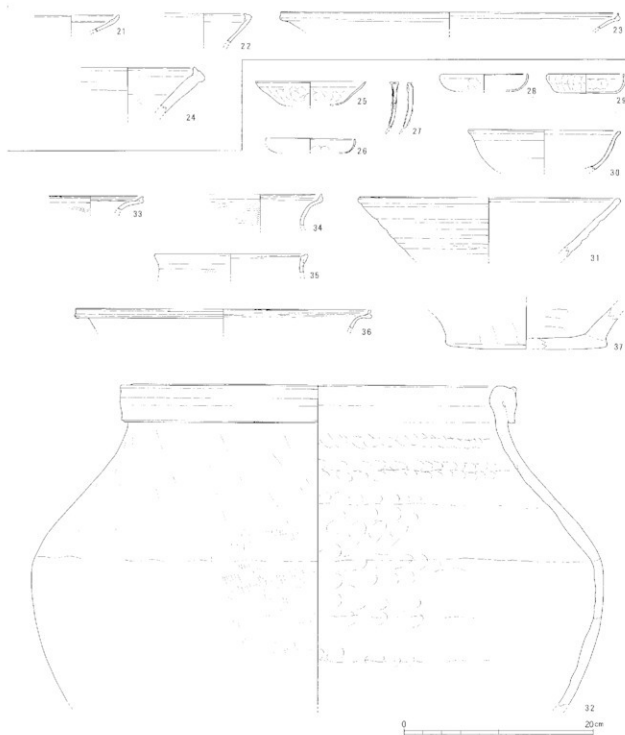
第11図 出土遺物実測図(1) (1:4)

4 土坑・炉出土遺物 (25～37)

SK7出土遺物 25は南伊勢系の土師器皿。京都系の影響を受けていると考えられているD形態のもので、概ね15世紀後半～16世紀に位置づけられる。

SK8出土遺物 26は南伊勢系の土師器皿。B形態のもので、概ね15世紀後半に位置づけられる。

SF11出土遺物 27は鉄製の釘。二次的な被熱は見られない。28・29は南伊勢系の土師器皿。B形態のもので、概ね15世紀後半に位置づけられる。30は青磁碗。外面には模様を持たない。31は瀬戸美濃産の直縁大皿。古瀬戸編年の後Ⅲ期（15世紀中葉）に位置づけられる。32は常滑産の甕。常滑高編年の第10



第12図 出土遺物実測図(2) (1:4)

番 号	実測番号	種・形	器種など	アフリカ	遺構・掘名等	大 き さ (cm)	調整・技法の特徴	粘土	色	調	残存度	特 記 事 項
1	002-01	青磁	碗	F 4	S B16 (F 6 pot 1)	(台) 4.8 (底) 4.8	外:ロクロナデ・削出し高台→底付外周施釉 内:ロクロナデ・施釉	密	黒褐色:灰 輪:オリーブ灰	N6/ 10YR6/2	高台部7/12	見込み部にヒタシ ア文
2	001-01	鉄製品	(小剣)	G 5	S B17 (G 5 pot 1)	(保存長) 7.0 (幅) 1.4 (厚) 0.4	—	—	—	—	—	茎と刀身間 刀身側が鋸切跡さ れている
3	001-02	銅製品	押笥	K 7	S B19 (K 7 pot 1)	(保存長) 7.1 (厚) 1.0	—	—	—	—	—	銅製のものに真鍮 メッキか
4	001-03	鉄製品	(手透網)	I 9	p01	(保存長) 2.5	—	—	—	—	小片	一部が厚くもろ。疑と しての形を残り部分あり
5	001-06	—	鉄片	P12	p05	(保存長) 4.8 (幅) 3.2 (厚) 3.2	—	—	—	—	—	—
6	001-05	—	鉄片	P13	p05	(保存長) 7.2 (幅) 3.6 (厚) 1.0	—	—	—	—	—	—
7	002-08	土師器	皿	O12	p03	(口) 6.8 (高) 1.4	外:ナデ→ロコナデ 内:オサエ・ナデ→ロコナデ	密	灰黄緑	7.5YR8/3	口縁部4/12	—
8	002-03	土師器	皿	P12	p01	(口) 7.8 (高) 1.2	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	密	にぶい黄 —	7.5YR6/3 5YR8/4	口縁部4/12	—
9	002-09	土師器	皿	Q12	p03	(口) 9.0 (高) 1.9	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	密	灰黄	2.5YR/3	口縁部5/12	—
10	002-06	土師器	皿	Q12	p03	—	外:ナデ→ロコナデ 内:ナデ→ロコナデ	密	灰濁 にぶい黄緑	7.5YR4/1 10YR7/3	小片	外面にスス付着
11	003-01	土師器	皿	O12	p04	—	外:ロコナデ 内:ロコナデ	密	灰黄緑 灰黄緑	10YR6/2 10YR6/3	小片	外面にスス付着
12	002-05	土師器	皿	P12	p03	—	外:ナデ→ロコナデ 内:ナデ→ロコナデ	密	灰濁 にぶい黄緑	7.5YR4/1 10YR7/3	小片	—
13	003-02	土師器	皿	P13	p08	(口) 26.8	外:ハケメ→ロコナデ 内:工具ナデ→ロコナデ	密	灰濁 灰黄緑	7.5YR5/2 10YR8/3	口縁部4/12	—
14	003-03	土師器	皿	Q12	p02	(口) 34.8	外:ロコナデ 内:ロコナデ	密	灰濁 灰白	7.5YR5/1 10YR8/3	口縁部4/12	—
15	002-07	土師器	皿	Q12	p02	(口) 21.0	外:ハケメ→ロコナデ 内:ナデ→ロコナデ	密	にぶい黄 灰黄	7.5YR7/4 7.5YR8/4	口縁部4/12	半球形
16	002-02	青磁	碗	P13	p01	—	外:ロクロナデ→施釉 内:ロクロナデ→施釉	密	黒褐色:灰白 輪:明オリーブ灰	7.5Y7/1 2.5G7/1	小片	外面に縦溝付文
17	002-04	養生土器	瓶	C 6	p01	(底) 5.0	外:ナデ 内:ナデ	密	にぶい黄緑	10YR7/4	口縁部4/13	—
18	006-03	石製品	大打石	O12	p04	(長) 5.0 (幅) 4.5 (厚) 2.5	—	—	—	—	—	石英質、重量79.1g
19	003-05	陶器	片口鉢	Q12	p01	(口) 33.0	外:ナデ→ロコナデ 内:オサエ・ナデ→ロコナデ	密	にぶい黄 灰黄緑	5YR7/4 10YR6/2	口縁部12/12	常滑産
20	003-04	陶器	楕鉢	P13	p06	(口) 32.0	外:ロコナデ 内:ロコナデ→輪目	密	黄緑	5YR7/6	口縁部2/12	信楽産
21	005-05	土師器	皿	R13	S H13	—	外:ロコナデ 内:ロコナデ	やや粗	にぶい黄緑	10YR7/3	小片	外面にスス付着
22	005-06	土師器	皿	R13	S H13	—	外:ロコナデ 内:ロコナデ	密	にぶい黄緑	10YR7/3	小片	—
23	006-02	土師器	皿	R13	S H13	(口) 36.0	外:ロコナデ 内:ロコナデ	密	灰黄緑	10YR4/2	口縁部4/12	—
24	005-07	陶器	片口鉢	R13	S H13	—	外:工具ナデ→オサエ・ナデ 内:工具ナデ	やや粗	黄	2.5YR6/6	小片	常滑産
25	005-01	土師器	皿	P12	S K 7	(口) 11.6	外:オサエ・ナデ→ロコナデ 内:オサエ・ナデ→ロコナデ	密	灰黄緑	10YR8/3	口縁部2/12	—
26	005-02	土師器	皿	P12	S K 8	(口) 9.4 (高) 1.5	外:オサエ・ナデ→ロコナデ 内:オサエ・ナデ→ロコナデ	密	にぶい黄緑	10YR7/3	口縁部4/12	—
27	001-04	鉄製品	釘	Q11	S F11	(保存長) 4.9 (厚) 0.6×0.4	—	—	—	—	—	先端欠損 切頭、被熱は受けて いない様子
28	005-04	土師器	皿	P11	S F11	(口) 9.4 (高) 1.8	外:オサエ・ナデ→ロコナデ 内:オサエ・ナデ→ロコナデ	密	灰黄緑	10YR6/2	口縁部4/12	—
29	005-03	土師器	皿	P11	S F11	(口) 8.4 (高) 2.1	外:オサエ・ナデ→ロコナデ 内:オサエ・ロコナデ	やや粗	黄緑 —	2.5Y6/2 2.5Y7/3	口縁部9/12	—
30	004-05	青磁	碗	P11	S F11	(口) 16.2	外:ロクロナデ→施釉 内:ロクロナデ→施釉	密	黒褐色:灰白 輪:オリーブ灰	N8/ 10YR6/2	口縁部4/12	—
31	006-01	陶器	直縁大皿	P11	S F11	(口) 11.6	外:ロクロナデ→施釉 内:ロクロナデ→施釉	密	黒褐色:灰黄緑 輪:灰オリーブ	10Y6/2 5Y6/2	口縁部1/12	瀬戸美濃産
32	007-01	陶器	瓶	P11	S F11	(口) 41.7	外:ハケメ→ロコナデ 内:ナデ→オサエ→ロクロナデ	密	灰濁 灰	7.5YR3/1 5Y5/1	口縁部4/12	常滑産
33	004-04	土師器	皿	Q11	S K12	—	外:ハケメ→ロコナデ 内:ナデ→ロコナデ	密	灰黄	2.5Y7/2	小片	—
34	004-03	土師器	皿	Q11	S K12	—	外:ハケメ→ロコナデ 内:ナデ→ロコナデ	密	にぶい黄緑	10YR7/2	小片	—
35	004-02	土師器	皿	Q11	S K12	(口) 16.2	外:ハケメ→ロコナデ 内:ナデ→ロコナデ	密	灰濁	7.5YR4/2	口縁部2/12	基部形
36	004-01	土師器	皿	Q11	S K12	(口) 31.0	外:ハケメ→ロコナデ 内:ナデ→ロコナデ	密	にぶい黄	7.5YR7/4	口縁部2/12	—
37	004-06	陶器	片口鉢	Q11	S K12	(底) 17.0	外:工具ナデ→オサエ・ナデ 内:工具ナデ	粗	灰黄緑 にぶい黄	10YR6/2 5YR6/4	底部2/12	常滑産

第 3 表 出土遺物観察表

型式（15世紀後半）のものである。

SK12出土遺物 33～36は南伊勢系の土師器鍋。いずれも第4段階c～d型式併行（16世紀前葉から中葉）に位置づけられる。35は茶釜形のものである。37は常滑産の陶器片口鉢。（竹田・西村）

【註】

- ①遺物の年代等に関しては、以下の文献を参考にした。
- ②南伊勢土師器鍋：伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990年及び、伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と

中世土師器工人」『研究紀要 第1号』三重県埋蔵文化財センター 1992年

- ③南伊勢系土師器皿：美杉村教育委員会「総括～これまでの北畠氏館跡発掘調査～」『北畠氏館跡9』2005年（形態の分類もこれによる）
 - ④古瀬戸陶器：藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅱ』瀬戸市歴史民俗資料館 1991年
 - ⑤常滑甕：中野晴久「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社 1995年
 - ⑥畑中英二「続・信楽地の考古学的研究」サンライズ出版 2007年
- ②第3節 自然科学分析 参照。

第3節 自然科学分析

1 自然化学分析の目的

谷野遺跡からは、鉄滓2点（5・6）が出土している。また、小柄（2）は刀身部分が鑿切断されており、手違鎌（4）は半分ほどが滓化するなど、古くなった鉄製品を地金として回収して金属加工を行っていた可能性が考えられる。

このことから、遺跡周辺の鉄製産の様相を検討する目的での鉄滓の金属学的調査（業務委託）及び、金属加工に関連すると思われる遺構埋土からの鍛造剥片の抽出を行った。これらの内容は以下のとおりである。（西村）

2 鉄滓の金属学的調査

（1）いきさつ

谷野遺跡は三重県松阪市飯高町宮本に所在する。平成20年度の発掘調査地区からは、戦国時代の集落跡が確認された。それに伴い鉄滓2点が出土しているため、遺跡周辺での鉄器生産の様相を検討する目的から、金属学的調査を行う運びとなった。

（2）調査方法

（2）-1 試料

第4表に示す。出土鉄滓2点の調査を行った。

（2）-2 調査項目

（i）肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

（ii）マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、

本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

（iii）顕微鏡組織

鉄滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の調査では3%ナイトル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

（iv）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉄滓中の晶出物の判定を行った。また金属鉄の硬さ測定も同様に実施した。

試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は100 μ fで測定した。

（v）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer） 調査

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される箇所ほど明るく、軽い元素で構成される箇所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

(vi) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO₂）、酸化アルミニウム（Al₂O₃）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K₂O）、酸化ナトリウム（Na₂O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO₂）、酸化クロム（Cr₂O₃）、五酸化リン（P₂O₅）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectro-meter）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

(3) 調査結果

TNN-1：椋形鍛冶滓（遺物6）

(i) 肉眼観察：37g弱の細長い形状でやや扁平な椋形鍛冶滓である。側面にごく小さな破面をもつがほぼ完形で、黒灰色を呈する。上面は比較的平坦で、下面はごく細かい木炭痕による凹凸が目立つ。表面には若干細かい気孔が点在するが、緻密である。

(ii) マクロ組織：写真図版11 ①に示す。微細な錆鉄や金属鉄が若干確認されるが、まとまった鉄部はなく滓主体の遺物である。また内部にはごく小型の気孔が多数点する。

(iii) 顕微鏡組織：写真図版11 ②～④に示す。滓中には白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：2FeO・

SiO₂）が晶出する。鍛冶滓の晶癖である。

また④の中央は滓中の微細な金属粒状である。3%ナイトルで腐食したところ、亜共晶組成白鑄鉄組織（C<4.26%）が確認された。少なくとも一部は白鑄鉄組織を呈するような炭素含有量の高い鉄素材を加熱処理していたものと推測される。

(iv) ビッカース断面硬度：紙面の都合上、硬度を測定した圧痕の写真が割愛したが、白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は448、454、470Hvであった。若干軟質であるが、ウスタイトの文献硬度値450～500Hv⁽⁹⁾⁽¹⁾とほぼ対応するため、ウスタイトに同定される。

(v) EPMA調査：写真図版11 ⑤に滓部の反射電子像（COMP）を示す。分析点3の微小明白色部は特性X線像をみると鉄（Fe）に強い反応があり、定量分析値は99.7%Feであった。金属鉄（Metallic Fe）に同定される。

また20の暗褐色微小結晶の定量分析値は51.5%FeO-48.7%Al₂O₃であった。ヘーシナイト（Hercynite：FeO・Al₂O₃）に同定される。また21の白色樹枝状結晶の定量分析値は98.2%FeO-1.0%TiO₂であった。ウスタイト（Wustite：FeO）で、微量チタニア（TiO₂）を固溶する。

22の素地部分の定量分析値は45.6%SiO₂-21.3%Al₂O₃-2.1%CaO-16.4%K₂O-1.3%P₂O₅であった。非晶質珪酸塩で、鉄分（FeO）をかなり固溶する。23の灰色柱状結晶の定量分析値は69.1%FeO-2.1%MgO-30.7%SiO₂であった。ファヤライト（Fayalite：2FeO・SiO₂）で、微量マグネシア（MgO）を固溶する。

(vi) 化学組成分析：第5表に示す。全鉄分（Total Fe）は60.10%と高値であった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.07%、酸化第一鉄（FeO）63.37%、酸化第二鉄（Fe₂O₃）15.40%の割合である。造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）19.57%で、塩基性成分（CaO+MgO）0.78%と低値であった。主に製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン（TiO₂）は0.20%、バナジウム（V）<0.01%と低値である。さらに酸化マンガン（MnO）0.04%、銅（Cu）も<0.01%と低い。

当鉄滓は鉄酸化物の割合が高く、製錬工程起源の

脈石成分 (TiO₂、V、MnO) の低減傾向が著しい。以上の特徴から、製錬工程で生じる不純物をほとんど含まない、きれいな鉄素材を熱間で処理した時の吹き減り (酸化に伴う損失) で生じた鍛冶滓と推定される。

なおE PMA調査の結果、ごく微量ではあるがチタン (Ti) の影響が確認されるので、始発原料は砂鉄の可能性が高い。

また1点のみであるが、滓中の微小鉄粒に白錆鉄組織が確認された。少なくとも一部は錆鉄組織と炭素含有量の高い鉄素材を処理したと判断される。鉄鍋など錆鉄製品 (古鉄) を鍛冶原料としていた可能性も考えられる。

TNN-2: 椀形鍛冶滓 (含鉄) (遺物5)

(i) 肉眼観察: 45gとごく小型で完形の椀形鍛冶滓である。表面には小礫の多数混じった土砂が厚く固着し、黒灰色の滓部が確認される。錆化による割れが若干生じており、特殊金属探知機のL (●) で反応があり、内部に金属鉄を含むものと推定される。

(ii) マクロ組織: 写真図版12 ①に示す。上下の明灰色部は滓部、中央の黒色部は錆化鉄で、その内部ではごく微細な不定形の金属鉄が散在する。

(iii) 顕微鏡組織: 写真図版12 ②③に示す。②の青灰色部は錆化鉄、不定形白色部は金属鉄で、③はその拡大である。3%ナイタルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト (Ferrite: α鉄) の組織が確認された。

また②の左下は滓部である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

(iv) ビッカース断面硬度: 紙面の構成上痕痕の写真を割愛したが、白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は421HVであった。風化の影響か、ウスタイトとしては若干軟質の値を示したが、ウスタイトと推定される。

(v) E PMA調査: 写真図版12 ④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。24の白色粒状結晶の定量分析値は99.3%FeOであった。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。

25の素地部分の定量分析値は38.4%SiO₂-18.4%Al₂O₃-5.4%CaO-6.2%K₂O-1.2%P₂O₅であった。非晶質珪酸塩で鉄分 (FeO) をかなり固溶する。

26の淡灰色盤状結晶の定量分析値は69.2%FeO-1.8%MgO-30.3%SiO₂であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO・SiO₂) で、微量マグネシア (MgO) を固溶する。

さらに4の微小明白色粒の定量分析値は99.5%Feであった。金属鉄 (Metallic Fe) に同定される。

(vi) 化学組成分析: 第5表に示す。全鉄分 (Total Fe) 41.21%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.06%、酸化第1鉄 (FeO) 12.57%、錆化鉄を含み酸化第2鉄 (Fe₂O₃) は多く44.87%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 30.69%とやや高めであるが、表層に固着する土砂の影響を受けた可能性が高い。また製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.22%、バナジウム (V) が<0.01%と低値である。さらに酸化マンガ (MnO) 0.02%、銅 (Cu) も0.01%と低値であった。

当鉄滓の滓部は、鉄酸化物および粘土溶融物 (SiO₂、Al₂O₃) からなり、椀形鍛冶滓 (TNN-1) (遺物6) と同様、製錬工程で生じる不純物をほとんど含まない、きれいな鉄素材を熱間で処理してできた鍛冶滓と推定される。

不定形の金属鉄部は鍛打の痕跡はなく、鍛冶処理途中で滓中に落下して取り残されたものと推測される。またはほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織であったが、鍛冶炉内の酸化雰囲気の中で脱炭した可能性も高く、鍛冶処理前の鉄素材の材質をそのまま反映したのとは断定できない。

(4) まとめ

谷野遺跡から出土した、中世後期の鉄滓2点を分析調査した結果、次の点が明らかとなった。

1. 分析調査した鉄滓は2点とも、ウスタイト (FeO) およびファヤライト (2FeO・SiO₂) が晶出する。製鉄原料の砂鉄起源の鉄チタン酸化物の結晶はなく、製錬工程で生じる不純物をほとんど含まない、高純度鉄素材を熱間で処理して排出された鍛冶滓と推定される。

なお滓中には、ごく微量ではあるがチタンの影響が確認されるため、始発原料は砂鉄の可能性が高いと考えられる。

2. 椀形鍛冶滓 (TNN-1) (遺物6) 中には、

非常に微細な白鉄粒が確認された。このため、少なくとも一部は鉄組織を呈する、炭素含有量の高い鉄素材を処理したと判断される。また鉄鋼など鉄製品（古鉄）を鍛冶原料とした可能性も考えられる。

また楕形鍛冶滓（TNN-2）（遺物5）中にも、未鍛錬で小型不定形の金属鉄部が存在する。こちらは炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織が確認された。ただし鍛冶炉内に落下した後に脱炭した可能性もあり、鍛冶処理前の鉄素材そのものとは断定できない。

〔註〕

- (1) 日刊工業新聞社『焼結組織写真および識別法』1968
 (2) ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、フェライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

(九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂)

3 炉址・竪穴建物出土遺物の鍛造剥片

谷野遺跡の2区東半では、炉（SF11）と竪穴建物（SH13）を検出した。周辺からは鉄滓（5・6）も出土しており、周辺で金属製品の加工が行われていた可能性がある。そのことを立証するため、関連遺構の埋土を採取し、鍛造剥片の抽出を試みた。同様の抽出は松阪市茅原町の東沖遺跡でも行っており、その結果とも照合したい。

試料採取 金属加工に関連すると思われるSF11及びSH13の中から、底に近い部分の埋土をそれぞれ1500g採取した。それを500gずつの3つに分け、そのうちの1包について抽出を行った。なお、今後異なった手法で分析を行えるよう、残り2包ずつは参考遺物として報告書掲載遺物とともに保管している。

鍛造剥片の抽出方法 採取した試料を乾燥させ、「TRISCOハンドマグネット吸着力250N」に鉄分を吸着させる方法で行った。

東沖遺跡では、①乾燥させた埋土、②水洗した埋土、③水洗後乾燥させた埋土の三種類を用いたが、今回は東沖遺跡で最も有効であった①の手法のみを行った。

結果 SF11からは、鍛造剥片の可能性のある剥片1点を確認した。SH13からは確認できなかった。

東沖遺跡との比較 前述の東沖遺跡では、鍛冶関連遺構の可能性のある土坑6基について同様の調査をした。その結果、鍛造剥片及びその可能性がある剥片を出土した遺構は2基で、いずれも1～2点確認できたのみであり、「周辺で鍛冶を行っていた可能性は残るものの、確実に鍛冶を行っているとはいえない」とされている。

同報告書では、「鍛冶を行っている遺構であるならば、もっと多くの剥片が出土する」とされ、「500gの定量サンプルでは100～200片程度の鍛造剥片が出土する」ことが指摘されている。

谷野遺跡では、可能性のある剥片1点を確認できたのみであり、確実に鍛冶を行っていたとは明言できない。（西村）

4 自然科学分析のまとめ

以上の化学分析から、谷野遺跡において鉄素材を使用した鉄器生産を行っている可能性がうかがえる。ただし、鍛造剥片が微量であり、鍛冶を行っている確証はできなかった。（西村）

〔註〕

- ①三重県埋蔵文化財センター「下茅原遺跡（第1次・第2次）、東沖遺跡発掘調査報告」2009年

試料番号	遺構名	乾燥		鍛造剥片	備考
		実施	重量(g)		
1	SF11	○	500	可能性あり	鍛造剥片の可能性のあるものが1点ある。
2	SH13	○	500	なし	

第7表 鍛造剥片抽出一覧表

第4節 結 語

1 鉄の加工について

谷野遺跡からは、鉄滓が出土し、一部が滓化した鉄製品や鋳で切断された鉄製品が出土している。鉄滓の分析では、铸铁製品を原材料としている可能性も指摘されている。遺構としても炉SF11や作業小屋と考えられる堅穴建物SH13が確認されている。これらの遺構埋土の鍛造剥片の抽出では、鍛造剥片の可能性が考えられるものが1点出土したのみであったが、遺物の状況などからみても、当遺跡で既存の鉄製品を回収して鉄の加工を行っていたことが伺える。関連する遺物の量も少なく、小規模もしくは短期間の生産であったのだろう。

2 屋敷地の構造について

今回の調査で確認された建物の時期は、長く見ても15世紀後半から16世紀後半と、短期間に集中している。また、同じ場所で1・2回の建て替えがなされている可能性が高い。谷野遺跡の建物等を検討し、屋敷地の様子を検討したい。

調査箇所からは、建物群のまとまりが3箇所確認できる。以下、西から「屋敷地1」「屋敷地2」「屋敷地3」とし、それぞれの構造や関連性を検討したい。

(1) 屋敷地1

掘立柱建物SB16・17がある。いずれも東西棟で、桁行3間以上、梁行2間の側柱建物である。西1間分の中央に柱穴をもつことも類似している。この2棟は柱穴の位置も近く、ほぼ同じ箇所での建て替え

と考えられる。柱穴に重複が無く、前後関係は確認できない。建物の西側と北側にはSK1・2を含む大きさ1m前後の土坑が集中して確認された。ゴミ穴等であろうか。建物の西に柱列SA18がある。建物の方向がN40°W付近であるのに対し、柱列の方向はN26°Wと大きくずれており、時期が異なる可能性もある。

(2) 屋敷地2

掘立柱建物SB19・25・26がある。いずれも東西棟で、SB19・25は桁行3間以上、梁行2間、SB26は桁行3間以上、梁行3間である。建物の方向がN40°~47°Wと近似している。3棟はそれぞれ重複している。規模等が若干異なるが、同じ屋敷地内の建替と考えられよう。屋敷地の西側は調査区外となっており、屋敷地1で見られたような土坑の集中は確認できない。

(3) 屋敷地3

掘立柱建物SB20~24、堅穴建物SH13、及び炉SF11がある。SB20・24は南北棟、SB22・23は東西棟、SB21は不明である。22~24は桁行3間、梁行2間、SB20は桁行2間以上、梁行2間である。建物の方向がN20°~32°Wと近似している。これらの建物の前後関係は確認できなかった。SB22・23は規模や形状が類似しており、同じ役目の建物の建替とも考えられる。その場合、SB23と直交するSB20がセットとなっていた可能性も考えられる。建物の西側を中心に土坑が集中している。

この屋敷3は、堅穴建物、炉をもち、周辺から鉄



第13図 遺構配置図 (1:500)

滓も出土していることから鉄の加工に関わる職人の屋敷であった可能性が考えられる。

(4) 各屋敷地の関連

これら3つの屋敷地の境には、区画溝はないが、それぞれの屋敷地の間は遺構密度が低く、各屋敷地の独立性を感じることができる。

各屋敷地からの出土遺物を見ると、いずれも土師器皿・鍋、陶器鉢・甕などの日常雑器を中心とする。磁器類もあるが、量が多いわけではない。これらの屋敷地はある程度の広さがあるが、出土遺物から見ると、住民がとりわけ富裕層であったとは断定できない。

3 谷野遺跡の位置づけ

谷野遺跡では、15世紀後半から16世紀後半の、3箇所の屋敷地が確認された。そのうちの屋敷地3は

鉄の加工に携わる職人の屋敷である可能性が想定される。

谷野遺跡は、谷野域に隣接している。谷野域を含む川俣谷の諸城は、16世紀後半に織田氏に敗れて落城したと伝えられている。谷野遺跡の屋敷地は、谷野域の存続時期に存在したと考えられ、城との関連も想定されるが、今回の調査では、明確に位置づけることができなかった。(竹田・西村)

(註)

- ①金属加工が行われていたと考えられる東沖遺跡では、鉄製品95点、鉄沖40点、鑞の羽口3点が出土している。(三重県埋蔵文化財センター「下茅原遺跡(第1次・第2次)、東沖遺跡発掘調査報告」2009年)
②第2章参照。

屋敷地	遺構番号	種別	建物方向		規 模				柱間寸法 (北→南、西→北の順)		備 考
			向き	方向	間数 桁×梁	桁行 (m)	梁行 (m)	建物面積 (㎡)	桁行 (m)	梁行 (m)	
1	SB 16	側柱	東西	N43° W	3以上×2	5.5以上	4.4	不明	2.0+2.2+?	2.2+2.2	
1	SB 17	側柱	東西	N40° W	3以上×2	4.8以上	4.1	不明	2.1+2.1+?	2.0+2.1	
1	SA 18	—	東西	N26° W	4	7.0	—	—	1.8+1.6+1.8+1.8	—	
2	SB 19	側柱	東西	N41° W	3以上×2	5.0以上	4.1	不明	(北辺)?+2.1+2.1 (南辺)?+?+2.5	2.4+1.7	柱穴底に根石を持つ
2	SB 25	側柱	東西	N40° W	3以上×2	4.9以上	4.2	不明	?+2.5+2.0	2.5+1.7	
2	SB 26	側柱	東西	N47° W	3以上×3	5.4以上	5.8	不明	?+1.6+1.9	1.9+1.8+2.1	
3	SB 20	側柱	南北	N32° W	2以上×2	3.2以上	4.0	不明	2.2+?	2.0+2.0	
3	SB 21	側柱	東西?	N20° W	1以上×1以上	3.0以上	2.1以上	不明	1.5+1.5+?	2.1+?	
3	SB 22	側柱	東西	N23° W	3×2	5.6	3.7	20.7	(北辺)2.0+2.0+1.6 (南辺)1.8+1.9+1.9	(西辺)2.0+1.6 (東辺)1.6+2.0	
3	SB 23	側柱	東西	N24° W	3×2	5.5	3.5	19.3	1.8+2.2+1.5	1.5+2.0	
3	SB 24	側柱	南北	N29° W	3×2	4.0	3.2	12.8	(北辺)1.5+1.5+1.0 (南辺)1.5+1.4+1.2	1.6+1.6	S H13と重複

第8表 掘立柱建物・柱列観察表

第4章 岸本遺跡（第4次調査）

第4次調査は、第3次調査の東側（A地区）と西側（B地区）の2箇所の調査を行った。A地区は、3層（にぶい黄褐色粘質土）及び10層（明黄褐色粘質土）上面を検出面と考えて機械掘削を行った。しかし、5層上面で第3次調査のSD14の続きと考えられる溝を確認したことから、掘りすぎってしまったと考えられる。

遺構は、第3次調査のSD14の続きを土坑状の形で確認した他は、数点の小穴を確認したのみである。

遺物は少なく、遺構からはpit 1から土師器小片が出土したのみであった。1は包含層出土の土師器甕である。平安時代後期のものと考えられる。（西村）

〔註〕

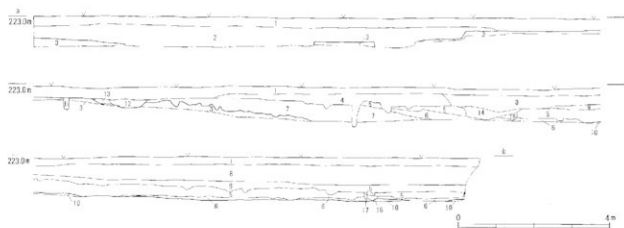
①三重県埋蔵文化財センター『岸本遺跡（第2・3次）発掘調査報告』2008年。



第14図 出土遺物実測図（1：4）

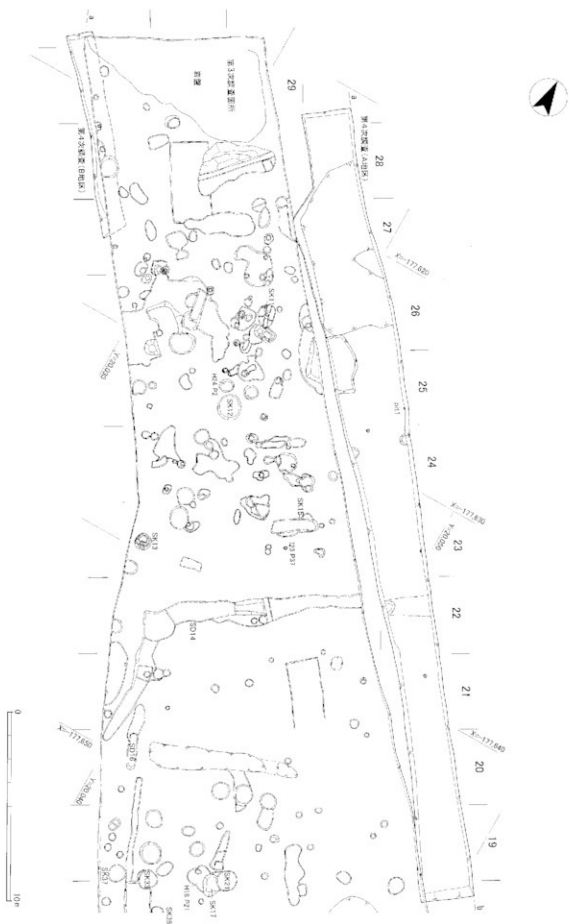
番号	実測番号	様・質	器種など	グリッド	遺構・層名等	大きさ (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	001-01	土師器	甕	—	A地区 包含層		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	浅黄緑 橙	7.5YR8/6 7.5YR7/6	小片

第9表 出土遺物観察表



- | | |
|---|---|
| 1 耕作土 黄褐色粘質土10YR3/2 | 10 基盤層 明黄褐色粘質土10YR4/4、粘性・締まりあり |
| 2 壤土 黄褐色土10YR4/1に多量の小石を含む | 11 pit1埋土 深黄褐色土10YR4/2 |
| 3 基盤層 にぶい黄褐色粘質土10YR7/3、粘性低、締まりあり | 12 pit埋土 黄褐色土10YR4/1、粘粒質、に第3層の土を含む |
| 4 遺物包含層 硬灰赤粘質土10YR5/1、粘粒低、締まり弱、多量の小石を含む | 13 pit埋土 灰黄粘質土10YR5/2、粘粒低 |
| 5 暗褐色粘質土10YR2/1、粘性・締まりあり | 14 SD14埋土 黄褐色粘質土7.5YR5/1、締まり弱、多量の小石を含む |
| 6 褐色粘質土10YR4/4、粘性・締まりあり | 15 SD14埋土砂 黄褐色土10YR6/1、粘性・締まりありに流木屑を含む |
| 7 にぶい褐色土7.5YR5/4、やや粘性・締まりあり、小石多少を含む | 16 埋土 褐色粘質土10YR4/4に粒状の硬質褐色粘質土10YR6/4を含む |
| 8 壤土 にぶい黄褐色砂10YR5/4に多量の小石を含む | 17 埋土 褐色粘質土10YR4/4に粒状の硬質褐色粘質土10YR6/4、炭化物を含む |
| 9 壤土 灰黄褐色粘質土10YR4/2に多量の小石を含む | |

第15図 土層断面図（1：100）



第16図 遺構平面図 (1 : 200)

第5章 総括

これまでの谷野遺跡、岸本遺跡の発掘調査で確認されたことをまとめ、両遺跡周辺の歴史について概観したい。

1 縄文時代

谷野遺跡では縄文時代の遺構、遺物は確認されていない。岸本遺跡では、平成12年の範囲確認調査で竪穴住居と考えられる遺構が確認され、多量の土器が出土している。第1次調査では糸痕系の土器が出土し、第2次調査では、土坑を確認し、中津式の土器片・石鏝が出土している^①。時期はいずれも後期前半に相当する。この時期は、県内でも遺跡数、分布数が拡大し、雲出川沿いでも遺跡数が拡大している^②。岸本遺跡は柳田川最上流の縄文時代の遺跡であり、ある程度拠点的な集落であったと考えられている^③。

2 弥生時代

弥生時代の遺構は、谷野遺跡及び岸本遺跡からは確認できなかった。岸本遺跡では、第1・3次調査で中期の土器が少量出土している。弥生時代中期には、七日市付近で遺跡数の増大が確認されており、岸本遺跡での遺物の出土も弥生文化定着の一環と考えられている^④。

3 古代

古代の遺構は、岸本遺跡の第1次調査で、平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物1棟が確認され、第2次調査では平安時代中～後半の土坑と小穴が確認されている。

4 中世

中世の遺構は、岸本遺跡の第1次調査、第3次調査で室町時代の土坑群が確認された。第3次調査で確認された室町時代の土坑群は、自然科学分析の結果、墓の可能性が指摘されている。また、谷野遺跡では、15世紀後半から16世紀後半にかけての3箇所^⑤の屋敷地が確認された。うち、1箇所では鉄の加工を行っていたと考えられる。

第2章でみたように、谷野遺跡、岸本遺跡のある「川俣谷」には、川を望む高台に点々と中世城跡が築かれている。発掘調査の結果からは、中世のこの地域の生活の一部しか知ることができないが、今

後の知見とあわせてこの地に暮らしていた人々の生活の一端を知る手がかりとなる。 (西村)

(註)

- ①『岸本遺跡』『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1985年
- ②『岸本遺跡(第2・3次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2008年、
- ③奥義次「原始」『飯高町郷土誌』飯高町 1986年
- ④上記②による
- ⑤上記③による

写真図版



調査区全景



1・2区中心部



2区中心部



1区全景（南から）



SB16・17（北東から）



2区全景（南から）



2区全景（北から）



屋敷地 3 周辺 (北東から)



S K12 (北西から)



S F11集石除去前（北東から）



S F11集石除去後（北東から）



調査前風景（南から）



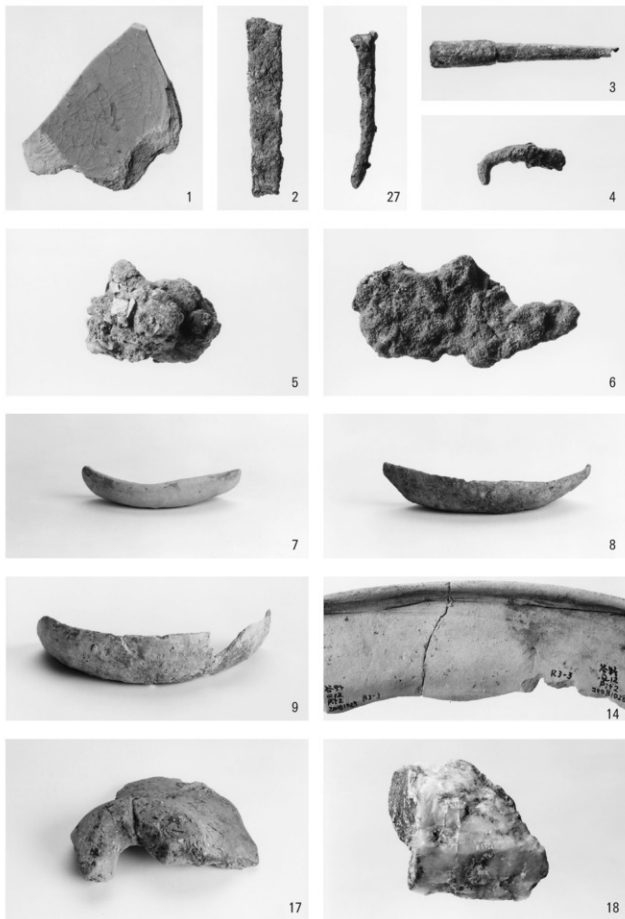
作業風景



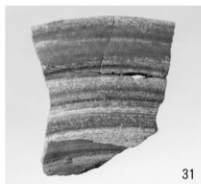
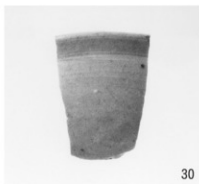
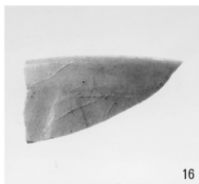
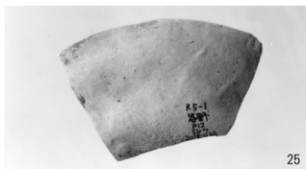
現地説明会風景



工事中の状況



出土遺物 (1)



出土遺物（2）

TNN-1 (遺物6)

椀形鍛冶滓

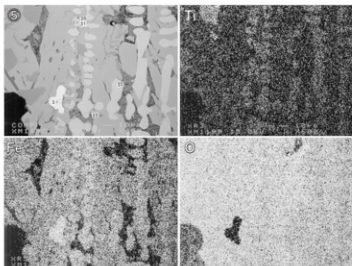
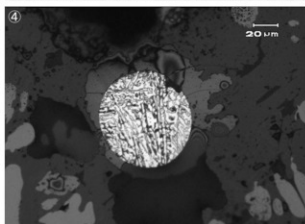
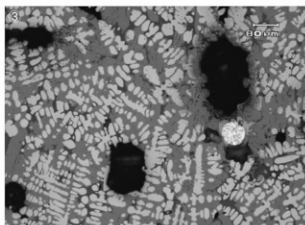
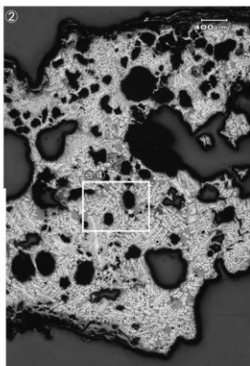
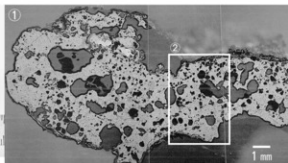
① マクロ組織

②~④ ①の拡大

滓部：ウスタイト・ファラライト、

微小金属鉄粒：ナイトルetch

亜共晶組成白鑄鉄組織



定量分析値

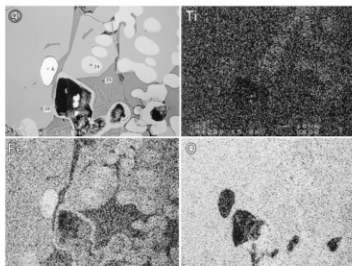
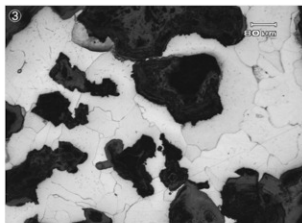
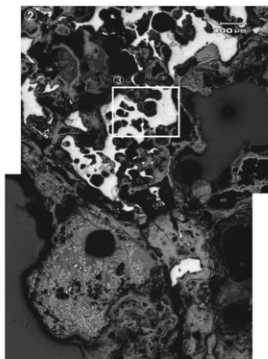
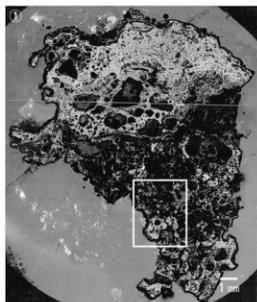
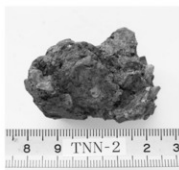
Element	20	21	22	23	Element	3
K ₂ O	0.053	0.008	16.422	0.008	O	0.169
Na ₂ O	0.071	-	0.406	-	S	0.006
CuO	0.011	0.014	0.026	0.063	Cu	0.051
MgO	0.158	0.034	-	2.145	As	0.023
CaO	0.003	-	2.104	0.092	P	0.001
Al ₂ O ₃	48.734	0.100	21.257	0.095	Ti	0.023
FeO	51.499	98.161	12.215	69.050	Fe	95.728
SiO ₂	0.990	0.324	45.806	30.602	Total	100.000
TiO ₂	0.573	1.012	0.324	0.950		
S	0.004	0.027	0.024	0.007		
MnO	-	0.037	0.008	0.163		
As ₂ O ₃	-	0.086	0.027	0.100		
P ₂ O ₅	0.023	-	1.253	0.062		
ZrO ₂	0.041	-	-	-		
Cr ₂ O ₃	0.091	0.058	-	-		
V ₂ O ₅	0.139	0.034	0.014	0.073		
Total	102.350	99.895	99.486	102.590		

滓部の反射電子像 (COMP)
および特性X線像

椀形鍛冶滓の顕微鏡組織およびEPMA調査結果

TNN-2 (遺物 5)
椀形鍛冶滓 (含鉄)

- ① マクロ組織
② ①の拡大
明白色部：金属鉄
滓部：ウスタイト・ファヤライト
③ ①②の金属鉄部拡大、
ナイトルetch フェライト単相



滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

定量分析値

Element	24	25	26	Element	4
K ₂ O	—	0.226	—	O	0.370
Na ₂ O	0.044	0.417	0.037	S	0.006
CuO	0.027	0.033	—	Cu	0.113
MgO	0.042	0.066	1.817	P	0.009
CaO	—	5.409	0.403	Ti	0.018
Al ₂ O ₃	0.343	18.296	0.006	Fe	99.495
FeO	99.309	28.286	69.160	Total	500.000
SiO ₂	0.352	38.387	30.329		
TiO ₂	0.480	0.095	0.022		
S	0.010	—	0.027		
MnO	—	0.063	0.076		
As ₂ O ₃	—	—	—		
P ₂ O ₅	0.023	1.239	0.260		
ZrO ₂	0.086	0.021	—		
Cr ₂ O ₃	0.049	0.053	—		
V ₂ O ₅	—	—	0.079		
Total	100.665	96.690	102.218		

椀形鍛冶滓 (含鉄) の顕微鏡組織およびEPMA調査結果



A地区全景（南東から）



A地区中心部（北西から）



B地区全景（北西から）



作業風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	たんのいせき、きしもといせき（だい4じ）はっくつちょうさほうこく							
書名	谷野遺跡、岸本遺跡（第4次）発掘調査報告							
副書名	— 三重県松阪市飯高町所在 —							
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	316							
編著者名	西村美幸、竹田憲治							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡番号					
たんのいせき 谷野遺跡	まつきかしいいせきからうみやもと 松阪市飯高町宮本 あざかわべ きどぐち 字川辺・木戸口	24204	e 79	34度 24分 04秒	136度 13分 02秒	20080916 ～ 20081209	962㎡	県道蓮峽線道 路改築事業
きしもといせき 岸本遺跡	まつきかしいいせきからうみやもり 松阪市飯高町森 あざきしもと 字岸本	24204	e 9	34度 23分 55秒	136度 13分 04秒	20071120 ～ 20071126	148㎡	県道蓮峽線道 路改築事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
谷野遺跡	集落跡	室町	掘立柱建物、竪穴建物、 土坑			陶器、土師器 (総重量8.42kg)		
岸本遺跡	集落跡	室町	溝、土坑、小穴			土師器小片 (総重量0.03kg)		
要約	<p>谷野遺跡、岸本遺跡は、三重県中央部を流れる櫛田川上流の河岸段丘上に立地する遺跡である。調査の結果、谷野遺跡では、15世紀後半から16世紀代の集落を確認した。この集落には3箇所の屋敷地が確認され、そのうちの1箇所は炉や作業場としての竪穴建物を持ち、鉄滓の出土などから鉄の加工を行っていたと考えられる。岸本遺跡（第4次）は2006年度に発掘調査を行った箇所の隣接地の調査を行い、2006年度に見つかっている溝の続きなどを確認した。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告 316

谷野遺跡、岸本遺跡(第4次)発掘調査報告

— 三重県松阪市飯高町所在 —

2010(平成22)年 3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 東海印刷株式会社
